

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	紅雨樓雜筆：雜録
Author(s)	蝶二，愁郎
Citation	龍南會雜誌， 5 4： 3 8 - 4 1
Issue date	1897-03-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4778
Right	

紅 雨 樓 雜 筆

蝶 二 愁 郎

(一) 檀の浦

天は蒼々として萬古に長へに、地は漠々として千歳に入し。獨り怪しむ、人世の榮枯盛衰定めなきを。想ひ見よ、花紅柳綠彼も一時なり。鬢翠眉黛是れも一時なり。北陽の月眉をこめて、影さやけく光り麗はしかりしも昨日の夢、江南の花目に映じて、色濃かに匂ひゆかえかりしも昔日の影、嗟、百年の榮華、一世の富貴、觀じ來れば渾べて是れ春の夜の夢に似たり。さはれ、北邙限りあらざるの青塚は空しく春人の憾を惹き、南朝跡なきの紅樓は徒らに才子の情を傷む。今日鏡に向ふて白頭を悲しむ昔日の紅顔の姿を見、今年花に對して凋萎を嘆く往年の傾國の語を聞くもの、誰か哀れを催さざるものあらんや。予學に熊城に遊び、路常に瀬戸海を航す。船檀の浦を過る毎に、想ひ平家の没落に溯りて、淚潸然、未だ嘗て双袖を絞らすんばあらず。あはれ、一門軒を并べて累葉枝を連ね、保元の春の花とさかえて、紅雲大内の山にたなびき、輕軒紫陌の塵にはせ、冠珮丹墀の月に躑ぎ、花鳥風月の戯れに日の暮るをわすれ、詩歌管絃の遊びに夜の明くるを知らず。朝に金樽の酒を傾ひけ、夕に瓊姬の膝に眠りし、二十余年の榮花の夢も、唯これ槿花一日の榮え、壽永の秋風蕭殺とえて、散りゆく木の葉と共に都を拂はれ、一の谷の險、屋嶋の浪、はかなく源九郎の爲めに敗られて、終に此浦の藻屑となる。平家の末路何ぞ此の如く慘なる。雖然、熟ら史を逐ふて上古滅亡の跡を考ふるに、凄愴慘憺憐れむべきもの、獨り平氏にのみ限らざるなり。而かも予特りこゝに悲む、その何の故たるを知らず。

(二) 辻占賣る少女

淡路嶋、通ふ千鳥をあはれなる音にたて、ちまたを辻占賣りありく、十歳ばかりのをとめあり

けり。風こはる冬の夜なかも、雨そはふる夏の夕も、をどめの聲のきこえざるはなかりき。ある時は意地わるき童等に、乞丐のむすめよと逐ひかけられ。またある時は門もる犬に、恐ろしき聲たてゝ吠えかけられ。いかに悔しきことの多からむ。いかに悲しきことのさはならむ、されど、たゞひと夜だに、少女の聲のきこえぬことはなかりき。月さよきある夜のことなりけり。予は端ちかく出で、空のけまきなど眺めてありけるが、はやつねの時刻となりたれど、をどめの聲は絶えて聞ゆす。夜もやうく更け行くに、さらに來るべきはひだになま。今までは一たびも休みしことなき少女の、今宵に限りて賣りに出ざるは、いかなる故にかあらむ。若しいたづきにもやと思ふまゝに、月のけしきも涙にくもる心地してたもしろからず。夜のふすまに入りても眠られず。長き夜をわづらひあかしぬ。あけの朝つとめて學びの舎に通ふ途中、いとむさくろしき家の中に、恐ろまうのよじる女の聲にまじりて、女のわらはの泣く音さへ聞えぬ。門口にたち聞ける人にむかひて、このよしを尋ぬるに、こはかの辻占賣るをどめの家にて、よべ道にて例の童どもに追たてられ、うり溜めたる金さへ何處ともえらず失ひて、泣くく歸りきにけるを、そが母の無慙にも縛りて、憂目みする處なり。よべ一と夜は少女の泣聲絶えざりき。とこたへぬ。あはれ、世には吾子の愛を、金にかゆる親もありけり。

(三三) 瓶 梅

六出花を裁して、嚴霜肌を冒し、萬木凋落、百花の眠り未だ醒めざるの時に當りて、獨り魁然として馨香を放ち、喚起笑を呈するものは、嗚呼是れ梅花にあらずや。詩人の愛、墨客の賞、樹下自から徑を爲す、亦宜なりと謂ふべし。頃日寒威俄かに加はり、朔風梢を掠めて四肢意の如くならず。火桶親むべくして机に倚るに耐えず。筆を投じて起つて顧みれば、壁間の瓶梅、香氣馥郁たり。予悚然としてまた机

に對ふて坐す。

(四) 手飼の犬

桑田變じて滄海となる。世は飛鳥川のとどへに洩れず。家に百萬の富を重ねて、使ひし奴僕も數知れざりしほどの分限長者の、あはれ一朝の失敗より、さのふの榮華を春の夜の夢と見て、世を秋草の露しげき野末の小屋に、いとわびしく暮せるがあまりき。萩の上風さびしく音づれて、訪ひくる人のけはひもなく。今はたゞ昔より愛で養ひし一疋の犬の、いつまでも側はなれずかしづくのみ。雨窓玉ぞたゝる晨、花間月清き夕、常にむかしのことのみまのばれて、浮世の人のつれなきに心もくづをれ、此をどこ、いつしか病の床にうち臥せしが、誰みどりする者もなければ、日にまし重りゆくさまにて、やがてなき人の數に入りぬ。里の役所よりは、からひに、かたばかりの葬式行ひたれど、野べ送りの人は絶えてなく。たゞかの犬の悲しげに、うちしはれて隨ひゆくのみ。つひには主人の墳墓の前にて、なき死にうせしとかや。あはれ、人のなさけの畜類にも劣りけるか。

(五) 丐 兒

六曲屏裡衾暖かき處、巨燧を擁して夢を食るの時、霜凍てたる橋上破菰を纏ひて、肌を劈く朔風に躰わななき、眠らんと欲して睡る能はざる乞丐の身を思はゞ、吾等果して如何の感かある。世間は窮困飢に泣く暗黒界の徒に情を寄するもの少く、威光燦爛たる顯要の輩に媚ふるもの多きを是非もなき。夜來の白雪は積んで、寒風骨に透ふるの晨。一丐兒來つて食を門に乞ふ。下婢無情、一陀の下に去らしめんとす。予急遽之を止め、近く入らえめて熟ら丐兒の風姿を見るに、年齒方に二七許、紅顔の少童、憐むべし、顔色憔悴して体飢に瘦せ、頭髮蓬の如く亂れて膚粟を生せり。纔かに身を被ふの垢衣雨に

朽ちて破れ、徒跣履くに物なし。予見るに忍びず、涙を噉りて問ふて曰く、そも汝何處の人にして誰家の子ぞ、丐兒歎歎良久して答へて曰、兒は橋下に人となりて、生れながらに乞丐の群にあり。未だ何人の子たるを知らず。と、予益彼が薄待をわはれみ、下婢に命じて飽まで食を與へしめ、汝有爲の少年にして、あたらし乞丐の間に一生を終らんこと遺憾ならずや。疾く彼等の社會を脱して、速かに口を糊するの道を求めよ。予亦汝の爲めに力むる處あらん。と因つて一襲の衣と若干の錢を與ふ。丐兒流涕恩を謝して去る。それより巷間復た彼の徘徊するを見ず。日月運ること速かにして既に三歳を經過する。雖。未だ彼の消息を聞かず。

(六) 哭 兒

父かたなる叔母君の、いとうつくしさをこの子を生み玉ひて、珠よ花よとめでいつくしみ、すきもる風さへ厭ひてはぐみたまひけるに、あはれ十日ばかりの日敷だに過ぎぬほど、そのちごむなしくなりしかば、叔父きみ叔母きみ、なに事も思ひわかぬまで、まどひなき玉ふこと限りなき。よその見る目も露けくして、おのれも涙にむせびながら、慰め參らすべき言葉もなく、一かたの心のうちを思ひはかりて、かくなん

けさ咲きそめしなでしこの

さかりも待たで散りにけり。

ゆく手もわかぬよみのくに

たれにたのまん道えるべ。